

近世城下町の変遷と松江城下町

松尾信裕

1. 中世の城下町の姿

城郭と居館

小高い山頂の頂に城郭（山城）、その山麓に居館を置く。
城郭は戦争時の詰め城 山頂や尾根に大小の曲輪が並ぶ。
居館は平時の居住空間。 平地城館

領主居館と家臣屋敷

領主居館は土塁や堀で囲われ、その周りに領主居館より小型の屋敷地が取り巻く。
それらを取り囲むように土塁や堀がめぐる。
領地支配の拠点であり、街道から離れていることが多い。
力をつけた有力領主が周辺の領主を倒し領国を拡大させ、戦国大名となってくる。
大名居館の周りに有力家臣の屋敷が配置。
直属商工業者の居住空間も出現。
城下町の外に町場が展開。 市
領主との関係性は薄い。
恒常的な店が並ぶ町へと変化。

2. 近世城下町の誕生

信長の城下町

小牧城下町 永禄 6 年（1563）に清須から居城を移し、永禄 10 年（1567）に岐阜に移るまでの間存続。

城郭の南に、堅町型の城下町を建設。城郭に接するように居館や家臣団屋敷を配置。
城下町の東部には武家屋敷地や寺院と推定される広い敷地。
西に広大な町人地を配置。並行する 4 条の直線道路に面した両側町。
これまでの城下町の町人地の規模を凌駕する規模。
長方形街区の中に短冊型地割を配置し、長方形街区の中央の町境には背割下水。
身分による居住空間の設定が完成。

城下町の東に川湊が存在。水陸交通を利用できる場所に城下町を建設。

岐阜城下町 美濃を制圧した後、永禄 10 年（1567）に小牧山から移転。

斉藤期の井ノ口を継承し拡大。金華山山頂に城郭、山麓に居館、その周囲に家臣団屋敷。
町人地はそこから西に延びる東西道路と、直交する南北方向の道路に面する両側町。
この構造は斉藤期のままで、信長による新しい町作りの痕跡は認められない。
惣構も斉藤期から存在。両側町構造も斉藤段階に出現。

信長は楽市楽座令で商職人を誘致。

安土城下町 天正 4 年（1578）建設開始。

比高約 100m の安土山山頂に天守や御殿を置き、山腹に曲輪。
城下町は安土山山麓の微高地に建設。その北端の湖岸に面する一帯に武家屋敷を配置。
その南部に町人地を建設。
城郭に向かって伸びる道路が基本軸となる城下町。

秀吉の城下町

長浜城下町 天正 2 年 (1574)、信長から湖北を与えられた秀吉が建設した最初の城下町。琵琶湖岸に城郭を置き、湖上交通と陸上交通路の結節点としてこの地を選択。

城下町建設にあたっては小谷城下から長浜に住人を移転。

城下町は城に向かって延びる東西道路に間口を開く竪町型。

北町・魚屋町・大手町・本町通りの間隔はほぼ同じ間隔。これら四町が最初の町。

天守を見通せる本町が町の中心軸。

信長・秀吉の城下町が家臣の城下町に大きな影響を与えた。織豊系城下町

江戸時代初期の城下町も織豊系城下町が規範となった。

大坂城下町 天正 11 年 (1583)、大坂に城郭と城下町を建設。本願寺寺内町の跡地を利用。

周辺都市の有力町人を強制的に大坂に移転させ、経済拠点となる城下町を目指す。

大坂城から四天王寺へと続く带状街区。大坂城から西へも城下町を建設。竪町型。

中世からの流通経済活動の拠点（四天王寺・渡辺津）を取り込む。

秀吉の権力拡大に伴って城下町が拡大。城域も拡大。惣構の建設。

三の丸建設に伴って、新しい町屋地区を船場に設定。

伏見城下町 文禄元年 (1592)、隠居城として指月に築城開始。

文禄 3 年、明使節来日に向けて改修。

宇治を經由していた街道を廃し、伏見を通る新道を建設 [足利健亮 1984b]。

伏見を京都と大坂、京都と奈良をつなぐ街道の結節点とする。陸上交通・河川交通の要衝。

慶長元年 (1596)、慶長の地震により、指月城の建物が倒壊。直後に木幡山に城を築く。

城郭に接して町人地の形態とは異なった方形街区を設定。そこに大名屋敷地を形成。

城下町を南北に縦断する 2 条の街道を設定し、町人地はそれに面する両側町。

城下町の流通を活性化させ、商工業の展開を促した。人口増加による城下町の繁栄。

この城下町で横町型を採用。この形がその後の各地の城下町に導入された。

信長が近世城下町の基本を創出し、秀吉が発展させた。

秀吉家臣の城下町

佐和山城下町 元亀 2 年 (1571) に浅井長政方の磯野員昌が籠り、信長に対峙するも開城。

その後、丹羽長秀が入城。信長にとって重要な城郭の一つ。

天正 10 年 (1582) に堀秀政が、天正 13 年 (1585) に堀尾吉晴が入城。

天正 18 年 (1590) には石田三成が入城。秀吉側近が配置される。

西側山麓より比高約 140m の山頂に本丸。山腹に曲輪が点在。

山麓東側の谷の中に居館や家臣団屋敷。土塁と堀で囲まれる。

城郭の東側に 2 条の南北道路に面する城下町。掘立柱建物や井戸が見つかる。横町型。

城寄りの道路に面して下級家臣と鍛冶屋や鋳物師も居住。

その東の道路に面して町屋。16 世紀後半～17 世紀初頭の生活道具が多数出土。

さらに東に中山道が南北に走る。町屋？

城の西の琵琶湖に面して港が存在。城の東は中山道を、西は琵琶湖を押さえる。

八幡城下町 天正 13 年 (1585)、豊臣秀次が築城。城郭は八幡山山頂部に築く。

山腹の南側斜面に居館。町屋は八幡山の南側の沖積地に碁盤目状に道路を通す町を建設。

町の中央にある新町を境に、道路が屈曲する。新町付近で建設時期が異なる？堅町型。
城下町を囲う施設はない。文禄4年（1595）、秀次事件に伴って廃城。

水口岡山城下町 天正13年（1585）、中村一氏が比高約100mの古城山山頂に築城。
野洲川に面し、杣川の合流点にも近く、東海道が通る水陸交通の要衝。
天正18年（1590）から増田長盛、文禄4年（1595）からは長束正家が城主。
五奉行や三中老になる秀吉側近が城主となる。豊臣政権にとって、重要な城。
南側の山麓に武家地。その南に町人地。武家地と町人地は堀で区分。
東海道に並行する2条の道を敷設し、3条の道からなる町人地を建設。横町型。
町人地を囲う惣構も存在か？

3. 松江城下町の形

城郭と武家屋敷

城と城下町は1607（慶長12）年に着工され、1611（慶長16）年に完成した。
「堀尾期松江城下町絵図」や「京極期松江城下町絵図」で城下町の形がよくわかる。
現代の地形図と比較すると、当時の形が今でもよく残っている。
狭隘な富田を廃し、宍道湖に面する領国支配に適した水陸の交通路の結節点を選択。
亀田山に城郭を築き、周囲の低湿地に城下町を建設。高い土木技術。
慶長年間には度重なる築城工事や城下町建設により、土木技術が高くなっている。
城に近い湿地帯に武家屋敷、陸化していた末次と白潟の砂州に町人地を建設。
武家屋敷は人工的な造成土で嵩上げ。
町人地との境として京橋川を開削。
城下町の堀川は道路と平行・直交する。規則性の高い設計。
城を中心に階層性の高い屋敷配置。

町人地

末次と白潟は宍道湖の沿岸流によって形成された砂州上に立地。
城下町建設以前からの港湾集落。
流通や商工業によって繁栄していた集落を城下町に取り込み、町人地とした。
この時期の城下町建設の常套手段。
末次砂州の中心軸に沿って道路を設定。城下町の街区方位の基準になった可能性が高い。
白潟は砂州の方向が末次とは違っていたため、町通りが直交していない。
町人地の通りは城に平行に通る。横町型。
末次本町や茶町は両側町。片原町は片側町。砂州の幅が狭かったためか。
末次本町や茶町と片原町の町境には幅1m未満の背割下水がある。
江戸時代初期に設定された背割下水が現代まで踏襲されている。
町境は直線なので、同じ町に属する敷地の奥行きは同じ。
松江城下町は宍道湖と大橋川を使う水上交通路の要地。
白潟の砂州が北に伸びていたことで、陸路と水上交通路の交差点となった。
城下町の内部に堀川が貫流。流通の利便性が高い。

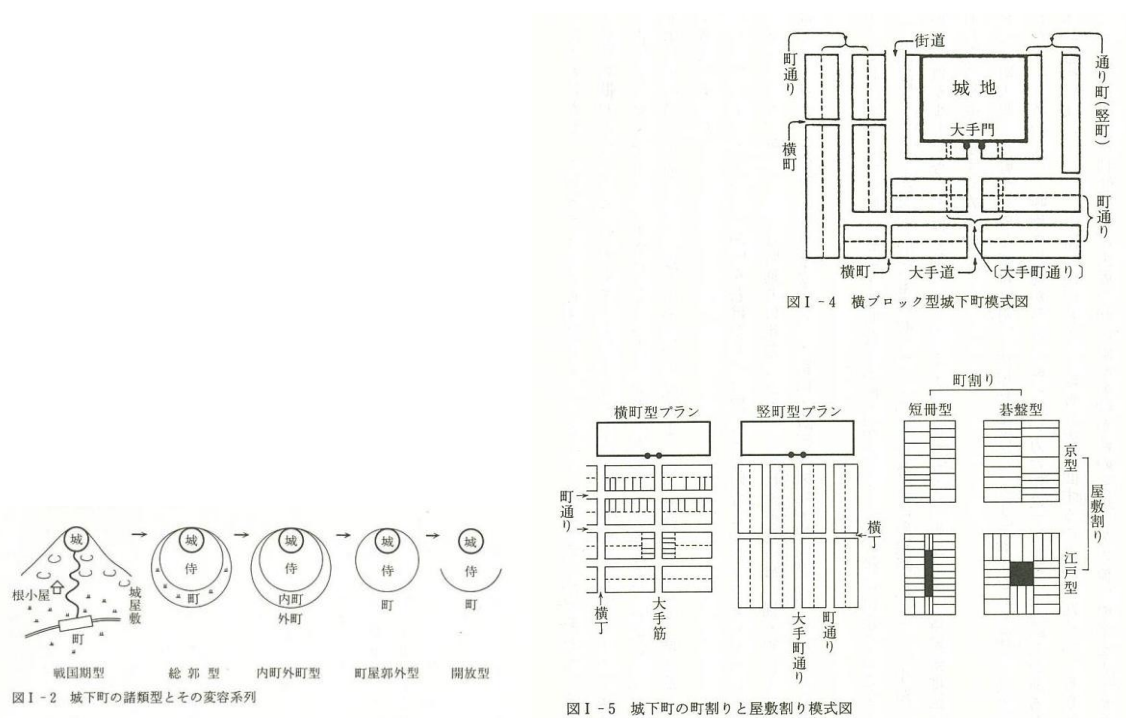


図1 城下町の諸類型とその変容系列

図2 城下町の町割りと屋敷割り模式図

(図1・2は矢守一彦 1988『城下町のかたち』筑摩書房より転載)



図3 「堀尾期松江城下町絵図」(島根大学附属図書館所蔵)